

そばのつながりを
みんなのつながりにしたい



渡辺 善司さん
(66歳・大字古河)

つくって楽しく、食べて健康

暑い季節になってきました。暑い日が続くと食欲もなくなってきます。そんな時、日本古来から食べられ、健康食品と言われている日本そばを食べる機会も多くなるのではないのでしょうか。そこで今回は、サラリーマンを定年退職後、第2の人生として、そば店(そば善)を経営する道を選んだという渡辺善司さんを訪ねました。

「当時の電電公社に入社して、埼玉、東京、群馬、栃木県などへ転勤しました。そばが好物なので各地で評判のそばを味わいましたが、いつかは自分の手でそばを打ってみたいと思っていました。定年の時には、会社から新しい就職口の話もありましたが、これからは自分の好きな道を歩きたい、地元古河にささやかな店を出したいと思い、そば打ちの修業をすることに決めました。」

そばづくりを学ぶにはかなりの時間が必要で

ぶんがくかん発
Vol.159

粒来哲蔵氏の詩集『島幻記』が「現代詩人賞」を受賞

「現代詩人賞」は中堅以上の詩人のすぐれた詩集を広く社会に推奨することを目的として、昭和58年に設定されました。過去の受賞作品は、清岡卓行・那珂太郎・田村隆一といった現代詩を代表する詩人の作品が名を連ねています。今回は、平成13年度に発行された詩集が対象となっています。

「昨年1年間に出版された詩集の中から現代詩壇の最高賞である現代詩人賞にふさわしい詩集を選んでほしい。」との現代詩人会丸地理事長の要請を受けて、長谷川龍生委員長を含む7名の選考委員が慎重な選考を行った結果、全員一致で粒来哲蔵氏の『島幻記』が第20回の現代詩人賞に選ばれました。

粒来氏にとっては、土井晩翠賞、現代詩人会H氏賞、高見順賞に続く4度目の文学賞受賞となります。

粒来氏は、「受賞のことば」で、「詩集『島幻記』は、魂のふるさと三宅島に帰ろうとして帰りが得ない男の怨嗟の声も混ざっている。島という名の母の懐にすがり得ない老人症の男の、見残した夢の切れ端も混ざっている。私はそれらを紡ぎながら、暗灰色の糸で島の幻の記を織ってみたのだった。」と語ってい

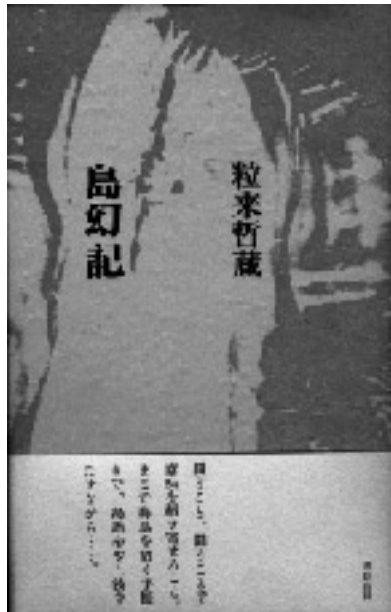
ます。

長谷川選考委員長はこの詩集について、「『島幻記』は全作品のバランスがとれていて、技量の高さが、手にとるように判ります。現代の民話というところでしょうか、やがてこの詩集一冊が、年月をふるにしたがって、伝承に変化していく勢いがあります。」と絶賛しています。

各委員も、「『島幻記』は虚構の書法を超えた、いわば「反世界」ともいべき独特の領域を構築している。」(青木)「受賞詩集『島幻記』は、分厚い想像力と思想に形成された島が現前してくる。」(今辻)「宮沢賢治以来の寓話世界」(内海)「透明性が魅力的」(辻井)等この詩集に賛辞を惜しみなく送っております。

授賞式は、6月1日東京都千代田区一番町のダイヤモンドホテルで行われ、古河出身で粒来氏の従兄弟にあたる詩人の粕谷栄市氏の作品評が受賞に花を添えました。

今回の受賞を記念して、文学館では、第一展示室の粒来コーナーに現代詩人賞関連の展示を9月以降予定しております。



粒来哲蔵「島幻記」書肆山田刊